紫西会報

第45号
発行所
茨城県筑西市下中山590
茨城県立下館第一高等学校
紫西同窓会
TEL (0296) 24-6344㈹
FAX (0296) 25-4673
編集兼発行責任者
大吉　悟
印刷所　戸頃印刷所

会長に就任して

紫西同窓会長　林　廣明（四十一回卒）

平成二十六年九月二十日に開催されました「平成二十六年度下館紫西同窓会総会」におきまして、同窓会会長に推挙頂きまして、身に余る光栄でございます。

私は、前会長でありました中山喜一郎会長を副会長の立場で支えておりましたが、今更ながら前会長の多大な功績に対し、誠に頭の下がる思いです。特に平成二十五年十一月十六日に開催されました下館第一高等学校創立九十周年記念式典は、実行委員長である前会長の強いリーダーシップのもとに、県教育庁役員、県教育委員、近隣の校長先生及び多くの来賓各位の出席のもとに盛大かつ厳粛に挙行されました。

私にとりましても、記念式典は大変感銘し、生涯忘れることの出来ない想い出となりました。

創立九十周年記念式典が成功の内に終了しましたが、八年後の平成三十五年には、母校下館第一高等学校は創立一〇〇周年の大きな節目を迎えることになります。その一〇〇周年に向けて、同窓会としてどのような協力が出来るのか、学校関係者の皆様と共にこれから協議を進めたいと思っております。

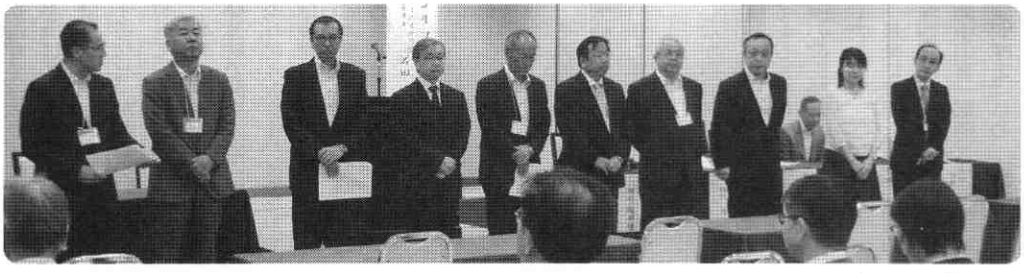
さて、私は同窓会会長に就任するにあたりまして、改めて「下館紫西同窓会会則」に目を通しますと、会則第二条（目的）に「本会は会員相互の連絡を堅くし、親睦向上を図ることを以て目的とする。」と目的が定められております。

しかし、実情は同窓会の会員が相当数であるため、全会員に連絡をするには多額の通信費の負担が必要である等の理由で会員への周期的な連絡及び親睦等が難しい状況であります。

そこで、同窓会員及び母校の情報を少ない費用で交換、共有出来ないかと模索しておりますが、インターネット等を利用することも一案かと考えております。皆様からのご提案をお待ちしております。

最後に私事になりますが、私の兄弟は私を含めまして、女一人と男五人の兄弟です。長女は下館第二高等学校に、男五人は下館第一高等学校に入学致しました。その後、私も結婚し、娘二人の父親となりましたが、娘達も下館第一高等学校に入学することが出来ました。兄弟五人と娘二人が母校にお世話になったのです。母校には本当に感謝しております。

その母校に少しでも恩返しができれば倖いとの思いで、同窓会会長を務めたいと思っております。



ごあいさつ

校長　石川　弘

紫西同窓会の皆様方には、日頃より本校の教育活動に対し、ご支援ご協力を賜り、深く感謝申し上げます。

この度、多くの業績を残されてご勇退されました原篤範校長先生の後任として赴任いたしました。本校には、平成十八年度から二年間、当時ありました定時制の教頭として勤め、今回で二度目の勤務となります。歴史と伝統あふれる本校に、再び奉職できましたことは、この上ない喜びでありますと同時に、着任以来、その責任の重さに、身の引き締まる思いの毎日でございますが、微力ではございますが、本校の新たな飛躍のため教職員と力を併せ努力してまいりたいと考えておりますので、よろしくお願い申し上げます。

さて、世界はグローバル化が急速に進展し、人や物、情報等が国境を越えて活発に行き交う状況にあります。また、日本国内では、震災からの復興や環境、エネルギーの問題、少子高齢化の進展など、課題が山積みしており、これからの世界や日本を担う人材の育成が求められています。安倍内閣の諮問機関である教育再生実行会議の第四次提言では、グローバル時代への対応、イノベーション創出にむけ、人材の質を飛躍的に高めることが求められるとして、そのような人材の育成のために、高等学校の質の確保と向上、大学の人材育成機能の抜本的強化などが指摘されています。

そのような状況の中、本校では、文武両道の教育方針のもと「困難と思えることにこそ、チャレンジする価値がある」を合言葉に、高いレベルでの学業・部活動・学校行事や、学ぶ意欲を創出させるAC（アドバンスト・クラス）活動・カナダの姉妹校との国際交流等、新たな取り組みにもチャレンジし、世界で活躍するグローバル人材の育成に向けて、様々な教育実践を展開しています。

お陰様で約八割の生徒が部活動に加入し、学業との両立の中で人間的成長を目標に、日々活気に満ちた学校生活を送っています。学習面では、既に「館一ニュース」やホームページ等でご承知のことと思いますが、昨年度は、国公立大学に一二四名（内現役一一五名）が合格いたしました。三年連続で現役合格一〇〇名を突破し、国公立大学現役合格者数では、県内ベスト五に入る実績を残しました。

また、北海道大学や東北大学、東京外語大など、難関校にも合格者を出す一方で、私立大学においても早稲田・慶応などの難関校を含む延べ五九二名（内現役五三六名）の合格を勝ち取る底力を見せてくれました。

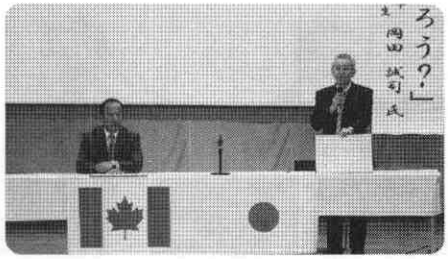
今年度は、いよいよAC活動の一期生の結果が期待されます。この三年間、何度か立ち止まる場面もあったとのことですが、生徒一人一人に寄り添う本校の教職員の懇切丁寧な指導と生徒たち一人一人の努力、同窓生の皆様の暖かい励ましにより、順調に学力を伸ばしてきました。間もなく素晴らしい結果をお伝えできるものと思います。また、二期生・三期生である後輩達も、自分たちの夢の実現に向けて日々の勉学に積極的に取り組んでおり、新たな伝統の構築に繋がるものと心強く感じております。

一方、部活動では、今年度、剣道部・文芸部・写真部・放送部が全国大会に出場したのをはじめ、剣道部・陸上競技部・水泳部が関東大会に出場するなど、素晴らしい活躍を見せています。

特に、剣道部は、ここ四年間連続で関東大会に出場し、今年のインターハイ県予選で準優勝したのをはじめ、国体少年男子の部の茨城県チームの選手として今年の長崎国体に出場した三年生の海老原淳君が、五位入賞を果たすなど、すばらしい実績を上げております。

その他、多くの部活動が県大会に出場し活躍しており、今後も本校の伝統であります「文武両道」の精神を大切にしながら、部活動の更なる活性化に努めていきたいと考えておりますので、同窓会の皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

最後になりますが、過日の紫西同窓会総会では、前会長の中山喜一郎様、新会長の林廣明様をはじめ、約一五〇名もの同窓生の皆様にご出席いただいて、心強い励ましのお言葉を沢山頂戴し、感無量のひと時を過ごさせていただきました。心よりお礼申し上げます。今後も「下館一高」という名前が多くの中学生の憧れであり、在校生や同窓生にとっても誇らしい学校であり続けるために、懸命に努めてまいりますので、同窓生の皆様の変わらぬご支援をお願い申し上げます。



同窓会便り

在バンクーバー日本国総領事
岡田誠司
（第五十一回卒）

一昨年九月、外務大臣から在バンクーバー総領事宛に送られてくるたくさんの書類の中に「平成二六年度かけはしプロジェクト実施に関する通報」という書類がありました。「かけはしプロジェクト」は日本のグローバリゼーションを進めるため外務省が推進している高校生の交流プログラムです。その日本側の派遣校が決まったとの通知でした。その書類を読み進んでいくと、私が管轄するカナダへは「下館第一高等学校」と記述されていました。我が母校の名前がそこに書かれていることに驚くと同時に、うれしさとなつかしさがこみ上げてきました。私が下館一高を卒業したのは一九七六年、四半世紀を超える月日が経っていますが、その間、日本と諸外国を行き来するという仕事柄、下館一高を訪れることも、同窓会に出席することもかないませんでした。そのような月日の流れの中で霧の中にかすんでいた母校の記憶がにわかに蘇りました。

日本政府は、「かけはしプロジェクト」や日本の学生の諸外国への留学の促進など我が国のグローバリゼーションへの取り組みを積極的に行っています。

こうしたグローバリゼーションのための取り組みは、なぜ必要なのでしょう？

グローバリゼーションは、地球規模化というように訳されますが、これは、文字通り、政治、経済、文化などが一国の枠を超えて地球規模で緊密な関係を持って動いていることを言います。私の携わる外交の仕事においても、日本国民の利益を実現するためには、日本という一国の枠を超えて、世界全体の枠組みの中で見ていかなければなりません。

私たちの日常生活においても、一見何の関わりもないと思われるある国のある出来事が、いろいろな形で影響を及ぼします。たとえば、昨年の冬、カナダ東部が寒波に見舞われたとき、日本の食卓から、そして下館一高のあの懐かしいパン屋さんからも、パンがなくなるかもしれないという事態に直面しました。

どうしてこういうことが起こりえるのでしょうか？

日本は、パンやパスタを作るためにカナダからたくさんの小麦を輸入しています。ところが、昨年カナダ東部を寒波が襲ったときには、日本向けの小麦の鉄道輸送が出来なくなり、日本への輸出が止まってしまいました。幸い、日本はこのような事態に備えて、小麦の国内消費量の二ヶ月分を備蓄しているので、実際に食卓からパンがなくなる事態は避けられました。しかし、この備蓄分がなくなる二ヶ月の間に、カナダから小麦の輸出を再開するための真剣な外交交渉が行われました。この小麦の例のように、私たちの日常生活の多くの物事が世界と連動して動いています。ですから、私たちは世界で何が起きているのか、そして、それが自分たちの生活にどういう影響をもたらすのかということを常に念頭におくことが必要です。これは、どのような仕事に従事していても同じ事が言えます。

昨年は、下館一高の後輩達とカナダで巡り会うことができました。カナダの高校生達の家にホームステイしたり、いろいろな場所を訪れ、たくさんの事を学んだと思います。同時に、カナダの人々に日本がどういう国なのかということについても、しっかりと伝えてくれました。こうした下館一高の後輩達の姿を目にして、卒業生として我が母校を改めて大きな誇りと感じるとともに、日本の将来が明るい希望に満ちていることを実感しました。

後輩諸君達の明るい未来と下館第一高等学校の更なる興隆を願って止みません。

新任の先生よりメッセージ

下館一高に赴任して

生駒忠夫

着任早々生徒から、廊下で、昇降口で、「おはようございます」と元気に挨拶をされ、非常に爽やかな印象を受けて「館一」でのスタートを切ることができました。

本校が、九〇年の歴史の変遷の中で、地域の要望と期待に応えるかたちでその役割を変えながら、有為なる人材の育成を行い、その人材が地域社会の発展に貢献してきたことは、大変素晴らしいことだと思います。その背景にあるのが、長い伝統の中で営々と培われてきた先生方の協力体制、授業への熱心な取り組み、そして、学校の方針に、生徒たちがそれぞれ目標をもって応えていたことだと実感しているところです。

さて、近年は、経済界の強い要請により、「グローバル人材」の育成が教育界の急務とされています。情報、資金、人々、物資、インフルエンザ・ウイルスなど、あらゆるものが国境を越えやすくなり、グローバル化が急速に進行していますから、経済界に限らず、これからは地球規模で広く物事を考えるという視点が必要になってくるのでしょう。

世界に通用する人材に必要なのは、英語力はもちろんですが、異文化を理解する力、論理的に思考プロセスを組み立てた上でのコミュニケーションの力、そして日本人としてのアイデンティティであり、人間としての教養（リベラルアーツ）がその土台になると言われています。この教養を身に付けるには、日々の学習をしっかりとしていくことです。本校は今年度六月にカナダの高校と姉妹校提携し、今後国際交流を進めていくこととしました。その交流の成果を取り込みながら毎日の学習活動を進めていけば人材育成も可能であると思います。

ただ「人材」という言葉には、本人以外の他者の視線が含まれます。全ての教育活動の大前提となるのは、本人の存在や意志を何より尊重することだと思います。それ故、「生徒のために何をすべきか」ということを常に念頭において諸活動に対応していかねばならない、と気持ちを引き締めているところです。

自信を持って前へ進め館一生

福井　勲（第五十八回卒）

本校に赴任して一年が経とうとしています。そして日々、生徒達に恵まれ楽しく過ごさせて頂いています。きちんとした挨拶や素直さ誠実さに接するたび、年齢の差を超え一人の人間として、時間を共有できることに喜びを感じています。一生懸命学習に取り組む態度や時々投げかけられる鋭い本質を突くような質問に、高い能力や感受性を感じています。謙虚にアドバイスを聞く姿勢に大きな可能性を感じています。いくつかの学校を見てきて今更ながらに、素晴らしい学校だなと思います。

では自分の高校時代はどうだったのだろうか？母校であるが故に余計にそんなことを考えてしまいます。今の生徒達と同じようにやれていたのか正直非常に不安です。謙虚さも足らなかったと思います。進路を直感と根拠のない自信で選んでしまったからでしょうか。物理の道を選んだことに後悔した時期もありました。今のように情報が手に入る時代でもなく、無知なまま進んできてしまったように思います。あの時の担任のアドバイスをもっと謙虚によく聞いておけばなあと思い出します。それでも色々なことに悩み苦しみ、迷いを友人と語らいながら過ごした本校での日々は、私のこれまでの人生の土台ともなっています。そう、館一で過ごす高校時代は人生の土台を与えてくれます。

今後益々社会は大きく変化していくことでしょう。そんな時代だからこそしっかりとした土台が必要です。その上で、変えてはいけないことと、己を変えて変化に対応していかなければならないことを意識することが重要だと思います。変えないこと、それは先に述べた皆さんの今の姿勢だと思います。素直さ謙虚さ誠実さは必ず皆さんの力になります。ぜひ見失わないでください。また、変化に対応していくためにはしっかりと学問に取り組んで下さい。身のまわりの今の環境や価値観や考え方が、自分にとって絶対普遍だと勘違いしていませんか。世の中には自分の知らないことや考え方、価値観がたくさんあります。学問がそれを教えてくれます。机上の学問だけでなく、広くフィールドに出て学問をしてください。必ず皆さんの力になります。自分の力を信じて、文系理系という狭くて古い分類にこだわりすぎないで、広い世界に羽ばたいてください。皆さんにはそれだけの力があることを確信しています。

高校時代は人生の土台を築き、己を磨く大切な時期です。小さな妥協などせずに自分を磨いてください。磨けば磨くほど輝くのが高校時代です。そんな皆さんに負けないように、私自身も皆さんの一助となれるよう努力していきたいと思います。よろしくお願いいたします。

学ぶことの原点

薄井裕美

四月、少なからず緊張しながら出勤した私を迎えてくれたのは、素晴らしい下館一高生達でした。かつて勤務していた父や、在学していた妹から聞いていた、昔から変わらない一高生の姿がそこにはあ